



「ゲストハウス」をご存知ですか？

ゲストを招く簡素な宿。食事は提供せず素泊まりが基本だが、リビングなど共同スペースで他の宿泊者との交流ができるようになっているのが特徴だ。

このゲストハウスの徳島県での先駆けのひとつが三好市の大歩危峡の近くにある「空音遊（くうねるあそぶ）」という名の定員12名の宿。築約90年の古民家を改装したこの宿は、地元の食べ物などを活用する地産地消を進めたり、宿泊客に家の中の余剰品を持ってきてもらって次の宿泊客がそれを使ったりと、“エコ”なゲストハウスである。

そこをご主人、保坂行徳さん（35歳）は、ちょっと変わった経歴の持ち主だ。会社勤めを3年で辞めて青年海外協力隊員としてアフリカのボツワナ共和国に2年間滞在。その後東京でカヌーに出会い、カヌーの本場の吉野川にきた時に住む事を決意した。地元とのつながりを大事にしている保坂さんが、自分の想いを大歩危峡の人に話すと「あそこに空き家があるよ」と勧められた。そこが現在の“空音遊”だ。

すべては「つながり」から

“空音遊”には、外国人もよく訪れる。「青年海外協力隊の時に必死で英語を勉強しました。その事が外国人の方とのコミュニケーションに役立っています。」「人生で精一杯努力した事には、何一つ無駄がないんだという事に気がつきました。」

普通のゲストハウスにはお風呂はあるが、ここにはない。「ここにわざわざ作らなくても、近くにはいい温泉があるんですよ。それにご飯も地産品を売っているスーパーが近くにあるから買ってきて、ここで料理してくれたらいいし、美味しい食堂もあるから紹介も出来ます。」

ただ、初めて泊まる場合は面倒に感じたり、他の宿泊客との交流に気後れしたりする人もいるだろう。「そんな時は私が間に入って、つながりをつくれます。いっしょに楽しんでいると、お客さん同士すぐに仲良くなって、ここでのつながりから新しいつながりが出来ます。そのことが嬉しいんです。」

地域と訪問者のつながりも考えながら、宿泊者同士のつながりを大切にする。

自然あふれる大歩危峡の中で、そんな保坂さんの話をもっと聞いてみたいと感じた。



「毎日三十分でも布団を干すと、お客さんが『ぐっすり眠れた』と喜んでくれるので、出来るだけ干しています。」と話す保坂さん。

ほさか ゆきのり
保坂 行徳さん

〒778-0104 三好市西祖谷山村榎442
エコゲストハウス「古民家宿・空音遊」
ホームページはこちらから <http://www.k-n-a.com/>

シリーズ・このひとから

生涯現役ボランティア ～パートII～

海陽町社会福祉協議会
前野 洋子

ボランティア活動の始まりは学生時代、退職後など人それぞれ違いがありますが、定年は無いと思っています。海陽町は「子どもは地域の宝、子育ては地域で」をモットーに十数年にわたり「びっくり箱」という事業に取り組んでいます。世代を超え、いろいろな考え、さまざまな技術をもった人たちの関わりにより活動が継続できています。

もちろん子育てに対して強い想いをもった世話人が



みんなをその気にさせてくれるのですが、スパイス的存在で会を引き締めてくれているのは高齢者の方々です。物事を考える時どの角度から入っていくかということが実に大切ですが、経験を重ねた知恵がピンチをチャンスにしてくれています。

以前聴いた「元気な高齢者の特徴」は①世話好きな人②教えられるレベルの特技をもった人とありました。「人の役に立つ」という生き方をしている上に、絶えず周りに充実した人間関係がある人は元気で幸せだということです。私自身も「生涯現役ボランティア」を目指し、また、たくさんのボランティアが活躍できるまちづくりに取り組んで行きたいと思っています。

前野洋子さん

海陽町社会福祉協議会 地域福祉課長
「障害があってもなくても、みんな一緒に。」を合い言葉に、おもちゃの図書館活動から地域共同作業所の設立支援。現在は、乳児から高齢者まで地域全体が継続的にボランティアを学び・実践できるように取組中。



エピソード2 緊急救援と復興支援

NPO法人TICO代表
吉田 修

青年海外協力隊のマラウイ派遣から帰国後、アジアの医師ネットワークをもつ AMDA（アムダ）に参加した。AMDA は、インドやイランの大地震、パプアニューギニアの津波、ルワンダ内戦、阪神淡路大地震等の緊急救援を実施した NGO だ。

何しろ緊急なので「明日この便で飛んでウガンダ側ルワンダ国境のこの町まで行って!」というような会話で物事が始まってしまう。大惨事や紛争が報道されて世間の注目を集めると、資金はますます集まる。とにかく行って何が出来るか混乱した現場で考える。しかし、現場到着までに数日経過する。それでもできるだけことをする。特に、自然災害に対して、緊急救援としての有効な活動はできなかった。

初期の救助・救命のステージは終わっていても、水・



吉田 修さん 外科医（自称兼業農家）
NPO法人TICO（ティコ）代表
アフリカをはじめ世界各国にて国際医療援助活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながらTICOを運営。

食糧・医療などのニーズはある。1か月ほど活動し、現場は次第に復興のステージに入る。崩壊したインフラの整備や医療・教育・産業振興などニーズは非常に高い。日本にも大きな期待を寄せているが、残念ながらこの頃になるとすっかり報道もされなくなり、人々の記憶も薄れてくる。当然資金も集まらない。現場からの要望も、資金不足で帰国しろといわれる。かなり疲れているので、あとはODAに任せようと無理に納得して帰国する。

緊急救援も非常に重要な国際協力であるが、私の性には合わないように思えた。



モザンビークで巡回診療をしている様子